

## 小牧野環状列石のもつ意義

国学院大学教授 小林 達雄

縄文人は定住的なムラの営みをはじめめるや、ムラの整備や生活空間の整備に手を染めた。その第一は、彼らのムラから見える自然を、自分たち特有の空間、景観の中に取り入れて味方に引き入れることである。例えば縄文時代前期、群馬県安中市の中野谷松原遺跡は、典型的な縄文モデル村であり、家が広場を囲んで円く展開している。そして、足りないところには墓穴がもうけられている。すなわち、死者と今生きている人が一緒になってムラ経営しているわけである。墓穴は長方形であったり楕円形をしてるが、その一端に細長い石が同じ所を向いて立っている。その先をたどっていくと浅間山の姿が望める。つまり、墓はすべて浅間山を向いているのである。これは、彼らの生活空間の中で自然の景観を、自分たちの意味あるものとして取り込んで、そして死者を埋葬するとき、その方向に向けているのである。

ストーンサークルからも特別な山が見えたりする。それは、ストーンサークルをつくった場所からそういう特別な山が見えるということがあって作ったのであらうと考えられる。小牧野遺跡のストーンサークルも、少し斜面だった所を削り、高いところから低いところに土を移動して全体を平らにして造作している大変な土木工事である。そのような土木工事をした上で、さらに大きな石を運んで来てストーンサークルというものを作り上げているのである。これは、当時の彼らの技術水準あるいは当時の彼らの持っている道具の限界を越えるほどの大変な大仕事である。例えば、もう少し隣にずらせばもっと簡単に、もう少し緩やかな平らに近いような場所があるのだが、そういうところに作らないで斜面のきついところを削平して作っているのには、そこでなければならないという断固とした理由があったからだと考えられる。視野の中に入る山、そしてその山の形だけではなくてそういう山と山との間に見られる日の出とか日の入りなどを計算に入れ、それを取り込んだ新しい人工物を設計し、彼らの生活空間に自然にはない人工的な空間を作り上げ、創造していくのである。自然ではない全く人工的であるという空間を作りながら彼らの自分たちが自分たちであるというような確認を求めたのではないだろうか。おそらく縄文時代の竪穴式住居が作られてから一つの空間認識が一連のものとしてずっとつながって広がっていくという中から生みだされてきたものではないかと考える。特にストーンサークルのような記念物を作ることは、ムラの整備、あるいは人工的空間を性格づける上で画期的なことで評価されるべきであらう。ストーンサークルが円であるということは、縄文モデル村を円く作ったということにもつながっていくきわめて重要な縄文人の観念の柱の一つであらう。あるいは、ストーンサークルのような記念物は、彼らの世界観なり観念の物質化とすることができるのである。

大湯のストーンサークルは夏至の時の日没に軸を合わせて設計している。また、寺野東遺跡の直径175mという大きなドーナツ状の土手からみると、冬至の日に筑波山の山頂から日が昇る。彼らは冬至の日を認識し、土手を築いていたのである。これは、ストーンサークルの土手版とすることができ、円く作るということの一つの強い共通性が彼らの世界観の中の大きな柱であったことが改めて見えてくる。さらにその記念物から望むと日が特別な所に沈んだり、特別な日に昇ってくるということを全部設計の中に入れているのである。位置の決定から設計の中に入れているのである。彼らのストーンサークルなり、環状の土手を自然の中に組み込んでいるのである。積極的にはめ込みながらそして、ストーンサークルというような人工的な、固有の記念物を作りながらも、自然と徹底的に対立するのではなく、自然とは

密着しているのである。全く自然から離れたものではなく、自然の中に自らが設計し、つくり上げた人工的記念物をいわば入れ子構造のように嵌めこんで、不即不離の関係であった。

ストーンサークルのようなモニュメントは、衣食住全てを含むような日常的な生活に直接関係するような仕事とは別に、全く觀念上の次元に属するものである。この建設は、日常性を越えた精神的な動機から全員一致の共同作業をしたという意味でも注目する必要がある。石を一つ運ぶにあたっても、一人や二人ではとても動かさないような石をいくらかでも持ち込んでいる。場所の選定によっては土地を削平するというようなことから、膨大な人数と月日が投入されているのである。小牧野遺跡の仕事量は、どれくらいかかったのだろうか。彼らは衣食住のための日常的な、どうしても節約することのできない基本的な時間を必要としている。分業化していない社会においては、基本的に毎日生きるために必要な時間というのがあるわけである。そういう中から捻り出して、大勢が集まってストーンサークルを作っているのだ。彼らが必要な時間から節約して時間を蓄め込むというそういうものは夏のある季節の一部のわずかなものである。ストーンサークルを作るというのは、いかに彼らにとって大変な時間の捻出を必要としたかということが理解できる。これは、日常性を越えたところに動機があったからこそ可能だったのであろう。つまり内から沸き起こってくる熱い思いがこういうものを表現したい、そういうものがあってはじめて実現可能だったのだ。

時間的な制約、道具の制約、技術の制約があったにもかかわらず、ストーンサークルを作ったというのは、世界観、觀念に促されてみんなが合意し、建設に携わったのである。そういう記念物であるということをもう一度読み取る視点が必要であらう。

そうした大規模な記念物を建設しようという合意があったとしても、それを組織する人を抜きにしては実現できるものではない。私は、既に縄文時代に階層があったと考えている。チーフを頂点において、上流階層、下流階層、あるいは、もしかしたら奴隷もいたかもしれない。縄文時代と同じような社会経済の北アメリカのバンクーバー辺りのトーテムポールを立てた人達は身分階層を持っている。だから、あれだけのモニュメントを作り得るのには、やはり身分階層の存在が必要である。ストーンサークルからもそういうことが言えるのであろう。そして、身分階層というのは、その時々の方のある者がトップに躍り出るのではなく、世襲化しないと安定しない。大きな仕事をするには、赫々たるその経歴を持つ家柄の人が上にたって、そして安定した組織力を発揮したのではないかというふうに考えられる。

あれだけの労力を投入したモニュメントは、一体何であろうか。ストーンサークルをはじめ、寺野東遺跡の土手からは、土偶・石剣・石棒など、衣食住と直接関わらない精神的な世界・觀念と結び付いて儀礼を通して実現したいという時に使う、いわゆる第2の道具が大量に出土している。つまり、ストーンサークルをはじめとする記念物は、そうした第2の道具を使用する多目的祭祀場であったのだ。その中には、葬送儀礼にかかわる墓もある。つまり、縄文世界のあれこれがストーンサークルの中にたくさん込められているのである。あるいは、縄文文化をストーンサークルが反映しているということがわかる。ストーンサークルのような記念物を自然の中にはめ込んで自分たち特有の空間を作り、そこに生きることによって、自分証明する場とした。それがひいては縄文人の、一人一人のアイデンティティの確立に関わるものとなっていたのである。

註 本稿は、平成7年10月21日に行われた『縄文講座 ストーンサークルの謎』の講演要旨をもとに事務局でまとめたものである。